

宗教教育としてのデス・エデュケーション

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

本論文では、宗教教育の可能性を、デス・エデュケーションによって探る。

〔第一章〕デス・エデュケーションは、アメリカを中心として1960年代頃から起こった。そして、日本では1980年頃から、いのちの教育の流れで、その実践が模索されている。日本におけるデス・エデュケーションの第一人者ともいえる上智大学のアルフォンス・デーケンの著述と、実際に行われた実践を基に、デス・エデュケーションとはどのようなものかを探る。そこでは、死についてのさまざまな取り組みがなされている。しかし、そこでは宗教性はあまり強調されない。その中で、末期癌患者の闘病記を扱うところがある。それらの中には、死を真剣にとらえる姿勢があり、宗教性が伺える。特定の信仰を持たない岸本英夫と千葉敦子の著述を参考にしながら、その宗教性を探る。

〔第二章〕宗教とは何かという問題を、ウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』に拠りながら考察する。そこでは、個人的宗教が扱われ、人間の側からの宗教に焦点を絞る。そして、神的存在と人間との関係は、人間の潜在意識的自己とより以上のものとの繋がりにみられる。また宗教の外的様相として、祈り、回心、聖徳、神秘主義を挙げ、人間側の問題として、二つの型をとりあげる。健やかな心の持ち主と、病める魂の持ち主である。そのような宗教の様相から教育の宗教性について考察する。

〔第三章〕宗教とデス・エデュケーションとの関連性を探る前に、教育における宗教の位置付けを見る。宗教は、第二次大戦前は厳しく制限され、戦中は思想統制によって、国家神道に制限され、戦後、そのような体制の見直しから憲法、法律に政教分離が厳しく明記された。本考察では、憲法と教育基本法における中立の立場を尊重しつつ、いかに宗教的な要素を教育に取り込めるかを検討する。

次に、教育の要ともいえる情操教育、ひいては宗教的情操について考察し、それがいかに死、いのちと関わっているのかをみる。また、宗教の見直しの一つとして、宗教的思考の独自性をみて、そこから現代においていかに宗教をとらえていくのかを検討する。そして最後に、宗教教育とデス・エデュケーションとの関連性から、宗教的な教育のあり方について検討していく。